ＪＳＴ、マレーシア同窓会開催
クアラルンプールにさくらサイエンス同窓生が集結

科学技術振興機構（ＪＳＴ）は、国際青少年サイエンス交流事業「さくらサイエンスプログラム」の参加者から構成されるさくらサイエンスクラブマレーシア同窓会と共催で11月1日、マレーシアの首都クアラルンプールで第5回マレーシア同窓会を開催した。当日は１００名を超える参加があった。

冒頭、マレーシア同窓会の幹事・チャチャ博士より開会宣言があったのち、ＪＳＴさくらサイエンスプログラム推進本部の庄司真理子室長があいさつ。庄司氏は「マレーシア同窓会はさくらサイエンスプログラムで培われた友情とアイデアが発展し続けている良い例である」と讃えた。来賓挨拶として、在マレーシア日本国大使館より二瓶大輔公使が登壇し、同窓生の役割の重要性を述べるとともに、「今後も同窓会活動の支援と日マレーシア間の友情と協力を推進していく」と語った。

前半は情報提供セッションとなり、最初に日本学生支援機構（ＪＡＳＳＯ）クアラルンプール日本国際教育交流情報センターの大澤宣子所長から、日本留学に関する情報提供があった。続いてＪＳＴの実施するＮＥＸＵＳ事業の国際共同研究について吉岡ＮＥＸＵＳ拠点専任コーディネーターから説明があり、同事業の若手人材交流（Ｙ－ｔｅｃ）についてはさくらサイエンスプログラム推進本部の単調査役より概要説明があった。

Ｙ－ｔｅｃの実施中プログラムより、実際に日本－マレーシア間での交流の様子について事例紹介があった。

金沢大学理工研究域機械工学系の辻口拓也教授は、マレーシア国民大学（ＵＫＭ）との電量電池技術の実用化に向けた共同研究について紹介。この共同研究は、ＵＫＭ燃料電池研究所のシャフブディン博士との長期にわたるパートナーシップをもとにしており、Ｙ－ｔｅｃ支援のもと、ＵＫＭチームは9月に来日、金沢大学チームも11月上旬にマレーシアを訪問し、ラボワークやさらなるコラボレーションを進めている。

マレーシア側の担当者であるＵＫＭのワン・ヌルファディラ上級講師は、理化学研究所の渡邊功雄核構造研究部専任研究員とのパートナーシップが研究にもたらした貢献について説明。Ｙ－ｔｅｃが若手科学者にとって有効な能力開発プラットフォームであると評価し、同チームメンバーの声も紹介した。

後半はチャチャ博士がモデレーターを務め、人工知能（ＡＩ）に関するフォーラムが実施された。パネリストとして、プトラ大学情報工学部学部長のシャマラ教授、シンガポールのスマートシティコンサルティング企業スカバイ会長アブラム・アブ・バカール氏、ＡＩ搭載型マーケットインテリジェンスプラットフォーム Newell Roadの共同創設者である森悠祐氏が登壇した。三者はそれぞれのバックグラウンドを交えながら、ＡＩが教育・科学・イノベーションに与える影響や、ＡＩと倫理とのバランス、人間との協働共生、グローバル連携に関する質問等に率直に答え、同会は盛会のうちに終了した。

参加者全員で記念撮影

Y-tecの活動について説明するマレーシア国民大学（UKM）のワン・ヌルファディラ上級講師